

「湯山三吟」の新注解

New Commentary of Yunoyama - Sangin

Katsuhiko SETA

勢田 勝郭

「湯山百韻」については、既に『新潮日本古典文学集成 連歌集』（昭和四五年）や『宗祇名作百韻注釈』（昭和六〇年）などにおいて、先学による注解が施されているが、以後の連歌研究の進展の結果として、いずれも、今日では不十分な所の多いものとなっている。本稿は、それに対し、今日の研究レベルに則した新たな注解を提供しようとするものである。

テキストは『宗祇名作百韻注釈』所載のものを基礎とし、他本と校合して、仕立・付合・去嫌の面でもつとも問題がないと思われるものを設定して用いた。ただし、紙幅の都合上、その設定の過程について具体的に述べることは省略せざるを得なかった。また、寄合の指摘も連歌の注解では重要であるが、これも必要最小限とした。了解されたい。去嫌については、末尾に一覧表の形で示すこととした。それについては、拙稿「連歌去嫌の総合的再検討」（奈良工業高等専門学校「研究紀要」第五二号）を参照していただきたい。ネット上で見ることが出来る。一覧表の「凡例」も、そこに譲る。また、本百韻には多くの古注が存在し、その主要なものは『宗祇名作百韻注釈』に収載されている。本稿も大いにそれを参考とさせていただいた。学恩に深く感謝するものである。ただし、これも紙幅の都合上、一々に引用することができなかった。必要を感じたら、遡って確かめていただきたい。なお、本稿の目的はあくまで「今日の研究レベルに則した新たな注解を提供する」ことにあるので、作品・作者についての一般的説明は、一切、他に譲る所である。

延徳三年十月二十日

賦何人連歌

01 薄雪に木の葉色こき山路かな

肖柏

《解釈》初冬の山路を行く。雪が薄く降り積もり、それが、紅葉して散り落ちた木の葉を一層色濃く見せている。

※賦物は「何人」、句中の「山」により「山人」となる。

※『春夢草』（太田本四〇二）、『大発句帳』（陽明文庫本六八七五）に入集。

薄雪に木の葉色こき山路かな

02 岩もと芒冬やなほ見む

宗長

《解釈》初冬の山路を行く。雪が薄く降り積もり、紅葉して散り落ちた木の葉を一層色濃く見せている。岩のもとに枯れ立ち残る芒の姿も、秋よりも猶風情があるように感じられる。

岩もと芒冬やなほ見む

03 松虫にさそはれそめし宿出で、 宗祇

《解釈》始めて松虫の鳴く音を耳にして、それに誘われるように宿を出たのは、いつの頃だったろうか。その後、冬になった今も、松虫は、岩もとに枯れ立つ芒の下で、やがて死ぬ命を惜しむように、かすかな音を立てている。秋よりも猶、更にあはれは深い。

松虫にさそはれそめし宿出で、

04 小夜更けけりな袖の秋風 肖柏

《解釈》夕方から松虫が鳴きだした。それに誘われるように宿を出て、野辺を行く。夜は次第に更けて、秋風が袖に涼しい。

小夜更けけりな袖の秋風

05 露寒し月も光やかはるらむ 宗長

《解釈》秋の夜、風が袖を過ぎる。置かれた露もいかにも寒そうである。夜が更け行くにつれて、月はますます光を増し、それが露に映している。

露寒し月も光やかはるらむ

06 思ひもなれぬ野辺のゆくすゑ 宗祇

《解釈》旅はいつも辛いもの。行く先は遠く、野辺を行く道の途中で日が暮れ、野宿するはめになった。夜が更けて寒くなり、置かれた露に月が映じている。その月の光も、都で見た月とは全く違っているように感じられる。ひよつとしてそれは、私の涙のせいかも知れない。

思ひもなれぬ野辺のゆくすゑ

07 語らふもはかなの友や旅の空 肖柏

《解釈》旅の空で知り合った人。互いに道連れとなつて語りあうが、行く道が違えば、慣れ親しむこともなく、そこではかなく別れる。野の道はまだ続く。行く先は遠い。

語らふもはかなの友や旅の空

08 雲をしるべの峰のはるけさ 宗長

《解釈》旅の空、越えるべき峰は遥か向こうに見える。その峰の上に雲が浮かんでいる。道連れのいない一人旅、あの雲を、しるべをしてくれる友として語りあいながら行こうか。しかし、私がいくら話しかけても、雲は何も答えてくれない。何ともはかないことである。

雲をしるべの峰のはるけさ

09 憂きはたゞ鳥をうらやむ花なれや 宗祇

《解釈》春の終わり、遙か行く手の峰に雲がかかっている。その雲を目当てにするように、道を行く。行くにつれて、雲と見えたのは、高根の遅桜が散らずに残っているのだということが知れる。直ぐにでもその近くへ行つて、春の名残を惜しみたいと思う。しかし「高嶺の花」、鳥ならば飛んで行けるが、翼の無い身ではどう

しようもない。何とも鳥が羨ましく思われる。

※「雲」を「花」と見紛うのは、花が開花するすこし前か、散つて間もなくの時期である。「高嶺の花」は、平地より開花が遅れるのが普通だから、後者とした。

憂きはたゞ鳥をうらやむ花なれや

10 身をなさばやの朝夕の春 肖柏

《解釈》春爛漫の朝夕。各地の花は、今を盛りと競い咲いている。あちこちの花を漏らさず見届けたいと思うが、それは無理。鳥ならば空を飛んで行けるが、翼の無い身ではどうしようもない。何とも鳥が羨ましく思われる。

身をなさばやの朝夕の春

11 ふる里も残らず消ゆる雪を見て 宗長

《解釈》世間から見放され古里に侘びて住む身の上。生きていたとて、何の望みがあるろうか。春になって雪が消える。自分も、いつそその雪のように消え果ててしまいたいと思いつつながら朝夕を過しているのだ。

※「雪の消ゆるを見て、ふる里に住みわびたる人の、わが身も雪のごとく消えばやと述懐する心か」云々とある古注（太田武夫氏蔵本古注Ⅱ以下、太田本）に従つて解釈した。ただし、この注に対しては「古郷に籠居したる身上なれ共、雪の消ゆるを見て、春に身をなさばやと興じたる心也。此の句を雪消ゆるごとく身も消えばやと聞くは、よろしからずとぞ」という批判がある（神宮文庫『百韻連歌集』所収古注Ⅱ以下、神宮本）。どちらでも可であると私は思う。

ふる里も残らず消ゆる雪を見て

12 世にこそ道はあらまほしけれ 宗祇

《解釈》古里は、冬の間、雪に閉じ籠められていたが、春になって雪が消えて道があらわれ、他所と往来が出来るようになった。道が通つているということは、有りがたいことだ（それと同じように、道理の通る世の中であつて欲しいと願わずにはいられない）。

世にこそ道はあらまほしけれ

13 何をかは苔の袂に恨みまし 肖柏

《解釈》苔の袂に身を褰した身の上。今更、何の悔恨もない。ただ、政治が乱れず、道理の通る世の中であつて欲しい。残る思いは、それ一つだ。

※「苔の袂」の「苔」は比喻であるので、植物として取り扱わないのが古来の作法。従つて、第一五句の「木草」と指合にはならない。

何をかは苔の袂に恨みまし

14 すめば山賤人も尋ぬな 宗長

《解釈》苔の袂に身を褰した身の上。今更、世にも人にも何の恨みもない。山に隠棲すれば、もう木樵や柚人と同じだ。都人よ、あなたたちは、木樵や柚人をわざわざ訪ねたりはしないだろう。だから、私を訪ねることもしないで欲しい。

※近代の注釈は、この句を述懐とするが、「山に住む」「山に入る」というだけでは、述懐として取り扱われない。一例を挙げれば、宝徳四年千句・第二「何路」の第三一句で「身の昔わすられぬべき月の夜に」と述懐が詠まれた後、三句隔てるのみの第三五句で「思ひ入る山をば雲やへだつらむ」と詠まれている。述懐同士は五句以上を隔てねばならないから、第三五句は述懐としては取り扱われていないと考えられる。同様の例は他にも多数存在する。『新式』には「称述懐詞事、昔・古・老・生死・世・親子・苔衣・墨染袖・隠家・捨身・憂身・命等之類也。凡、雖為述懐之意、不露頭詞者、述懐不用来也」とある。この作法が適用されているというのが私の考えである。なお、この点については、以後一々指摘しない。

すめば山賤人も尋ぬな

15 名もしらぬ木草のもとに跡しめて 宗祇

《解釈》人里を離れ、様々の木や草に囲まれた場所に居を定める。そうすれば、もう山賤と同じ身の上。ただし、人よ、辺りの草や木の名を尋ねないでくれ。私はまだその名を知らないのだから、答えようがないではないか。

※太田本に「この付けやう、ことに面白き也。尋ぬなと云ふに、今度は大事なるを、人尋ぬなと也。住めば山賤とこそなれ、いまだ草木の名も知らぬなり」とあるのに従って解釈した。ただし「名もしらぬ木草のごとくに成りたる身を、昔は何がし誰がし殿にてましますらなど尋ねらるゝ事をいとふよし也」とする古注(天満宮文庫滋岡本古注Ⅱ以下、天満宮本)も存在する。いずれでも可であろう。

名もしらぬ木草のもとに跡しめて

16 あはれは月になほぞ添ひゆく 肖柏

《解釈》人里を離れ、名前も知らない様々の木や草に囲まれた場所に居を定める。とりわけ、夜になって、月影を受けて周囲の草木が幽玄微妙に浮かび上がるのを見れば、世のあはれは、より一層、身にしみて感じられる。

※天満宮本に「名月の方にはあらざるべし」とあるのに従って解釈した。勿論、「馴れぬ草木の陰にて月を見れば、猶面白き也」という注のごとく無難に解釈しても、可であろう。

あはれは月になほぞ添ひゆく

17 秋の夜もかたる枕に明けやせむ 宗長

《解釈》秋の夜、枕を交わし語り合う二人。夜が更けて月が出て、互いの思いは添い行くばかりで、言葉は尽きることがない。長いはずの秋の夜も、すぐに明けてしまふことだろう。

秋の夜もかたる枕に明けやせむ

18 思ひの露をかけしくやしき 宗祇

《解釈》お互い好きで好きで堪らないのに、中々心に任せて逢うことができない二人の仲。稀の逢瀬に、語り合う言葉は尽きることがない。秋の夜は長いというが、

そんなことはない。もう間もなく夜が明ける。私は帰らなければならぬが、別れが辛くてならない。いっそ、最初にこの人に思いをかけることさえしなかつたら、こんな辛い思いをせずにすんだのにとさえ思ってしまう。

思ひの露をかけしくやしき

19 誰がならぬあだの頼みを命にて 肖柏

《解釈》私はどうして、あの人に思いをかけてしまったのか。不実な人だということ、もう解っている。しかし、やはり私は、あの人を当てにしてしか生きて行くことができないのだ。最初にこの人に思いをかけることさえしなかつたら、こんな辛い思いをせずにすんだのにとさえ思ってしまうが、それは全て、私自身の心がしたことなのだ。

※「露」に「命」が寄合。他の例は「種の花にむすびし露消えて／人の命やさだめざるらむ」(紫野千句・第四「何物」二五／二六)など多数。証歌を挙げる必要はあるまい。

誰がならぬあだの頼みを命にて

20 さそふつて待つわび人ぞ憂き 宗長

《解釈》辛いことばかりの身の上、私はもうこの土地では暮らしてゆけそうにない。このままでは、辛いことが更に重なるばかり。誰でもいいから、別な場所に私を誘ってくれる人がいないかと、つくづく思う。そうすれば、私も人生をやりなおすことができるかもしれない。しかし、そんな人が現れる保証はどこにもない。そんな、当てにならないことを当てにして、私は生きています。

※「わびぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらば去なむとぞ思ふ」(古今・一八・九三八、小野小町)を踏まえた付合である。

さそふつて待つわび人ぞ憂き

21 すみ離れ今はほどさへ雲の路に 宗祇

《解釈》都を遠く離れ、雲の彼方の僻地に辛い日々を送る身の上。都のことが恋しくてならない。誰か、私を都へ誘ってくれる人が現れないかと、つくづく思う。

※付句は「忘るなよ程は雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで」(拾遺・八・四七〇、たちばなのともた)を念頭に置いた仕立と思われるが、如何。

※『下草』(金子本五二四、続類従本四九六、東山御文庫本五二六)に入集。

すみ離れ今はほどさへ雲の路に

22 入りにし山よ何かさびしき 肖柏

《解釈》世間を離れての山中での独居生活。今では、都も遙か雲の彼方の存在になった。寂しさはもとより覚悟の上。それなのに、時々、寂しくてどうしようもない思いになるのは、一体何故なのだろうか。

※「何か寂しき」は、「寂しくない」ではない。「寂しくないはずなのに、時に、寂しくてどうしようもなくなる」のである。そのように解釈するのが、宗祇流の連歌

に対する正しい態度である。以上、若い人のため。

入りにし山よ何かさびしき

23 わきてその色やは見ゆる松の風

宗長

《解釈》道は山中に入る。松風が過ぎて行く。松はときわの常緑樹、(紅葉樹と違って、秋となっても)寂しく色を変えることはないはずなのに、この寂しさは一体何なのだろうか。

※「寂しさはその色としもなかりけり真木たつ山の秋の夕暮」(新古今・四・三六一、寂蓮法師)を念頭に置いた付合であることは、古注(天満宮本ほか)に指摘するとおり。

わきてその色やは見ゆる松の風

24 泉を聞けばたゞ秋の声

宗祇

《解釈》夏の終わりの庭。松風が涼しく袖を過ぎる。ただし、松は常緑樹。秋が近付いていることを感じさせる色の変化は特に見えない。それでも、庭の泉水の音は、もう既に秋となつていくかのように涼しげに聞こえてくる。

※視覚と聴覚を対比した付合で、「見ゆ」と「聞く」が寄り合う。「見れども飽かず難波江の浦／聞きてこそ古き都は恋しけれ」(顕証院会千句・第十「二字反音」六四／六五)など。

泉を聞けばたゞ秋の声

25 蛩とぶ空に夜深く端あして

肖柏

《解釈》夏の夜、涼を求めて、端居する。庭の泉水の音は、まるで秋のように涼しく、夜空には蛩が飛び違う。思わず夜が更けるのも忘れてしまった。

※『源氏物語』の中川の宿の面影を指摘する古注が存在する(天満宮本・神宮本)。本文を引用すると「風涼しくて、そこはかとなき虫の声／＼聞こえ、蛩しげく飛びまがひて、をかしきほどなり。人々、渡殿より出でたる泉にのぞきあて、酒のむ」(帚木)のごとくである。

蛩とぶ空に夜深く端あして

26 もの思ふ玉や寝むかたもなき

宗長

《解釈》夏の夜、あの人のことが思われ、眠ることができない。屋の縁に出て、夜空を眺めると、蛩が飛び交っている。あの蛩は、あの人を思う私の魂が、私の身を離れてさまよっているものかも知れない。

※「もの思へば沢の蛩も我が身よりあくがれにける玉かとぞ見る」(後拾遺・二〇、一一六二、和泉式部)を本歌とする付合。「蛩」と「玉」とが寄合。例は「飛ぶ蛩かげほの暗く照らす夜に／わが寝る玉や人に見ゆらむ」(応仁元年十二月五日「何路」一七／一八)など。

もの思ふ玉や寝むかたもなき

27 枕さへ知るとは知るな我が心

宗祇

《解釈》「人を恋していることは、枕さえもが知る」と言われているが、我が心よ、そんなことは忘れて気にしないようにしよう。それを気にしていたら、魂の落ち着いて寝る場所がなくなり、私の身体を離れてさまよふことになってしまうではないか。

※「枕が思ひを知る」という和歌の例は「わが恋は人知るらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ」(古今・一一・五〇四、読人しらす)など。

※「思ふ」に「心」、「寝る」に「枕」を対応させた付合。他の例は、「住みがたき庵と何と思ふらむ／我が心だに隠家ぞかし」(文和千句・第一「何人」七五／七六)、後者は「松風も寝られざりしに月を見て／更けて枕に近き虫の音」(永享九年三月二十一日「山何」一一／一二)など。共に、単独ならわざわざ挙げるまでもないレベルだが、組み合わせられると、ちよつとしたポイントとなる。

枕さへ知るとは知るな我が心

28 涙をだにもなぐさめにせむ

肖柏

《解釈》あの人を恋しくてならない。私はどうすればよいのだ。せめて、思い切り涙を流して泣けば、少しは心が休まるかも知れない。ただし、そんなことをすると涙が枕に降りかかり、私の恋を枕までもが知ることになるが、私の心よ、そんなことは、もう気にしないことにしよう。

※「枕」と「涙」とが寄合。他の例は「覚えすむすぶ手枕の露／いつとも身はならはしの涙にて」(文和千句・第三「何木」四六／四七)など。和歌では「涙川枕ながるゝ浮寝には夢もさだかに見えずぞありける」(古今・一一・五二七、読人しらす)など。

涙をだにもなぐさめにせむ

29 藤衣名残おほくも今日ぬぎて

宗長

《解釈》親しい人を亡くした悲しみは尽きぬものだが、服喪の期間には限りがある。今日、喪服を脱ぐことになるが、悲しみは尽きない。どうすればよいのだ。せめて思い切り涙を流して泣けば、少しは心が休まるかも知れない。

※「限りあれば今日ぬぎすてつ藤衣はてなきものは涙なりけり」(拾遺・二〇、一一九三、藤原道信朝臣)を本歌とする付合。「涙」と「藤衣」が寄合。他の例は「つさせぬものや涙なるらむ／たちかへて御被する日の藤衣」(明応四年九月晦日「十三仏名号」八二／八三)など。

※『壁草』(大阪天満宮本・二一九八、大東急記念文庫本・二二五二、続類従本・二四三八、書陵部本・二二七二)『六家連歌集』(雑一〇〇)に入集。

30 出でむもかなし秋の山寺

宗祇

《解釈》親しい人を亡くした悲しみは尽きぬものだが、服喪の期間には限りがある。

心を残しながらも、今日、喪明けの法要を営み、喪服を脱ぎ捨て、山寺を出る。季節は秋、悲しさがあらためて身にしみる。

※古注（太田本）にも指摘する所だが、「秋の山寺」の「秋」の語の選択が絶妙である。他のどのことばを用いても、この句に及ばない。例えば「出でむも悲し峰の古寺」とか「出でむも悲し奥山の寺」などとすると、付合は一挙に凡庸となる。こういう所で、宗祇連歌のレベルの高さを実感して欲しいと思う。

出でむもかなし秋の山寺

31 鹿の音をあとなる峰の夕ま暮

肖柏

《解釈》参籠明けの日の夕暮、峰の寺を出る。背後から鹿の音があわれげに聞こえる。秋の情趣が深い。

鹿の音をあとなる峰の夕ま暮

32 野分せし日の霧のあはれさ

宗長

《解釈》野分が過ぎた日の夕暮、あたりの草木は強い風に吹き乱されたままである。霧に包まれた峰の方から、鹿の鳴く声が聞こえてくる。秋のあわれが、身にしみて感じられる。

野分せし日の霧のあはれさ

33 しづかなる鐘に月待つ里見えて

宗祇

《解釈》野分の通り過ぎた後の道。途中で日が暮れてしまった。闇夜で何も見えないが、霧が出ているのだろう、空気が湿っている。已むを得ず月の出を待っている、と、遠くから、静かに鐘の音が聞こえてきた。その方角を眺めると、夜霧を透して、里の灯がかすかに見える。里人も、月の出を待って、まだ寝ないでいるのだろうか。※ポイント「月待つ里」というレトリックの所以。鐘によって里の方向を知る→闇の中に灯が見える→里人はまだ寝ていない→何故寝ていないのかと推測するのである。平凡な付合のようなだが、宗祇連歌の品位の高さが如実にうかがえるものである。研究者は、天満宮本に「本歌・由緒もなく、何とやら面白き句也とぞ。野分の眺望、身づから吟じて知るべし」とあるのに従って、それを理屈抜きで感じ取るべきであろう。

しづかなる鐘に月待つ里見えて

34 行きて心を乱さむも憂し

肖柏

《解釈》里の灯が見える。人は、まだ寝ずに、静かに月の出を待っているのだろうか。鐘の音が遠く響く。行ってみようか。いや、わざわざ訪れて静かに月の出を待っている人の心を乱すのも、無粋なことかも知れない。

行きて心を乱さむも憂し

35 我ならでかよふや人もしのぶらむ

宗長

《解釈》あの人の所には、私以外にも通う男がいるようだ。それが誰か確かめたいが、わざわざ行って問い詰めるのも、相手の気持ちを考えると、無粋なことだろう。

その男だつて、私と同じく、人目を忍んでいるから。

※天満宮本に「我がとふ人に、また忍ぶ人あるべし。行きて見頭さんこそ本意なからめと、好色の人は、用捨あるもの也。物語などに、この心多し」とあるのに従って解釈した。ただし、「好色」などということに縁のない現代人である私には、素直には納得できない心理ではある。

我ならでかよふや人もしのぶらむ

36 旧き都のいにしへの道

宗祇

《解釈》旧都への往來の古道。ここを行く人は、私に限らず誰もが昔を懐かしく思いやることだろう。

※前句の「しのぶ」は、先の付合では「人目を忍ぶ」こと。それを「昔を偲ぶ」ことに取りなして句境を転じている。天満宮本に「行様珍重なるもの也」と評される所である。

※「しのぶ」に対して「都」・「いにしへ」が共に寄合。例は、前者は「そのことなぐしのぶ我が方／志賀の浦都はさても何時の頃」（応永二十八年五月二十九日「何目」八二／八三）など。後者は「しのぶ心はよわりもぞ行く／いにしへに立ち返るべき道ならで」（文明十四年二月二日「何人」四六／四七）など。証歌の必要はあるまい。

旧き都のいにしへの道

37 咲く花も思はざらめや春の夢

肖柏

《解釈》かつて都がおかれた地の春の古道。桜花は昔と変わらず美しく咲いている。この花も、きっと、夢のように過ぎ去った花やかだった時代のことを、回想していることだろう。

※語の寄合は、いくつかの組み合わせが考えられるが、「都」に「花」、「いにしへ」に「夢」と付けているとするのが適当と思われる。他の例は、前者は「いつの都ぞ志賀の名どころ／下水のさざ波に立つ花ちりて」（応永三十二年六月二十五日「何人」三八／三九）など、後者は「過ぎにし方は何もいにしへ／花を見る夢さへ覚むる朝ぼらけ」（応永三十一年九月二十七日「何船」六八／六九）など。証歌は挙げるまでもあるまい。※「夢」は、普通なら夜分の取り扱ひを受ける語であるが、「春の夢」「秋の夢」「夢の世」などは夜分とはされないのが古來の作法。従って、第三三句の「月」「鐘」、第四一句の「月」とも、指合にはならない。

咲く花も思はざらめや春の夢

38 桜といへば山風ぞ吹く

宗長

《解釈》桜の花が咲いたと思えば、途端に山風が吹いて花を散らす。所詮、自分が持てはやされるのも春のあいだの一瞬の夢のようなものだ、花自身も、きっと思っていることだろう。

※「桜」に「咲く」を利かした秀句仕立。「折りうゑし枝に桜と告げやらば散るや散らずやなどや尋ねむ」（二条太皇太后宮大弑集・二〇）など、和歌以来の手法である。

連歌では、「いざ桜とや風は吹くらむ」(文明八年正月十一日「何路」二二)など。

桜といへば山風ぞ吹く

39 朝露も猶のどかにて霞む野に

宗祇

《解釈》はかないものの代表のような朝露さえもが長閑に感じられるほどの春霞の野であるが、桜の花が咲いたと思えば、途端に山風が吹いて花を散らす。何とも口惜しいことではないか。

朝露も猶のどかにて霞む野に

40 うちながむるもあぢきな世や

肖柏

《解釈》霞たなびく春の野。はかないものの代表のような朝露さえもが、なお長閑に感じられる。それに比べて、世の人の有様はどうか。いつ長閑に感じられる時があるというのだ。残念だが、それが人の世の現実なのだ。

※「朝露は消えのこりてもありぬべし誰かこの世を頼みはつべき」(続後拾遺・一八・一二四一、読人不知)を念頭においた付合であろう。

うちながむるもあぢきな世や

41 更くるまで身の憂き月を忌みかねて

宗長

《解釈》秋の夜、独居の寂しさ・辛さがひときわ身に滲む。眠ることができないままに月を眺めていると、いつの間にか夜も更けてしまった。「月を眺め続けるのは忌むべきことだ」と言われているのは承知のはずだが、何故かどうにもならない。

※「ひとり寝の佳しきまゝに起きあつゝ月をあはれと忌みぞかねつる」(後撰・一〇・六八四、よみ人しらす)を前提とした付合である。前句の「ながむる」の対象は、先の付合では「この世の有様」であったが、この付合では「月」となる。取りなしが鮮やかに決まっている。

※『壁草』(大阪天満宮本五三六、統類従本六二六、書陵部本六三二)・『宗長百番連歌合』(二五)・『宗長連歌自註・興津苑』(八四)・『六家連歌抄』(秋二五)に入集。

更くるまで身の憂き月を忌みかねて

42 今よりいとふ長き夜の闇

宗祇

《解釈》よくないことだと解っているのに、月を眺めているうちに夜が更けてしまった。何故かという、もう今から、死後、無明長夜の闇路に赴きたくないと思っっているから。この理屈、解るかな？

※和歌の秋の長夜の闇と、仏教の無明長夜の闇が、共に「長き夜の闇」と表現されることを利用して、前句の内容を理屈付けた付合である。その理屈付け方に、強引な意外性があり、それが納得できるかどうかが俳諧的な面白みとなる。よって、解釈は、右のごとく謎かけ体とした。以下、若い人のために云えば『新撰菟玖波集』において、宗祇が「俳諧」の部立を廃したことから、近代の研究者の一部には、宗祇は俳諧体の付合を排除したと言う向きもあるが、全くの誤解である。優美な表現に包まれているので、一目それと気づかれないが、俳諧的付合もまた宗祇連歌の一体として

無視できないことは、実際に作品を読めばすぐに納得される。

今よりいとふ長き夜の闇

43 いさり火を見るもすさまじ沖つ船

肖柏

《解釈》夜になって、海人たちの船は沖に出て、灯をともして漁りをしている。生きてゆくためには仕方ないことだとは言え、夜ごとに殺生を繰り返す彼らは、後の世どうなるのか、荒涼とした気分になる。それを思うと、死後、無明長夜の闇路に赴くことが、今この時からも厭わしく感じられる。

いさり火を見るもすさまじ沖つ船

44 タベの波のあら磯の声

宗長

《解釈》海辺の夕べ、荒磯に波が打ち寄せ、凄涼とした音をたてている。海人たちの船は沖に出て、火を灯して漁を始めたようだ。

夕べの波のあら磯の声

45 時鳥名のりそれとも誰わかむ

宗祇

《解釈》荒磯に夕波が打ち寄せ、大きな音を立てている。時鳥は一声名乗りをあげたようだが、こんな状況では、一体誰が聞き分けることができようか。

※「なのりそ」の隠題。「あまりの音の荒磯の波/時鳥名のりそれともいつ聞かむ」(文明十四年九月二十八日「初何」八二/八三)などの先例がある。「いかにぞや名のりそれとも問はむにも忘れ貝をや海人は告げまし」(村上天皇御集・八〇)など、和歌にも例が存在する。

※「磯」と「なのりそ」とが寄合。他の例は「波かゝる磯の小草の見えわかで/我と我が名をえやはなのりそ」(熱田神宮法楽永祿六年千句・第六「花之何」三三/三四)など。証歌は「睡ある荒磯に生ふるなのりその我が名つげせよおひはしぬとも」(古今和歌六帖・三・一八四五、あか人)など。

※「波の音が高いので、時鳥が名乗りをあげても聞こえない」という発想は、正統的な和歌にはないもの。優美な表現に包まれているが、そこに俳諧性が認められよう。

※「なのりそ」の去嫌上の取り扱いは植物の草類。ただし、隠題で言う時は、植物とは間隔二句以上で可とされる。従って、第四九句の「思草」と指合にはならない。

※『下草』(金子本二〇〇、統類従本一九八、東山御文庫本二〇四)に入集。

時鳥名のりそれとも誰わかむ

46 かへらむ旅を人よ忘るな

肖柏

《解釈》故郷へ帰ろうとする道。時鳥も「帰るに如かじ」と名のりを挙げてくれている。しかし、長く故郷を離れていた私が、帰った時に私の名を名乗ったとしても、一体どれほどの人がそれと気付いてくれるだろうか。故郷の人よ、どうか私のことを忘れないでいてくれ。

※時鳥は「不如帰」と鳴くという故事を踏まえた付合。有名な割に本来の典故が知られないが、大漢和辞典には『蜀王本紀』の文が引かれている。ただし『蜀王本紀』

は仮託の書である。

かへらむたびを人よ忘るな

47 ありぬやと心みにすむ山里に

宗長

《解釈》世間が厭わしくて仕方がないが、捨てざるほどの強い意志があるわけでもない。取りあえず生きていけるかどうか、試みに山里に住むことにする。決して、もう二度と世間には戻らないというつもりではないのだ。中途半端で情けないことだが、また帰って来る場合があるかも知れないということを忘れないでいて下さいね。

※前句の「たび」は、先の付合では「旅」であつたが、この付合では「度」に取りなされていふと考へ、右のごとく解釈した。如何。

※「心み」には「試」という替字がある。同字は五句去が基本であるが、替字がある場合は間隔二句で可とされる。従つて、後の第五〇句の「心」とは指合にならない。

ありぬやと心みにすむ山里に

48 ならばばしをれ嵐もぞ憂き

宗祇

《解釈》嵐が身にしみて辛い。もともと世を捨てざるほどの強い意志があつて山里に居を移したわけではないのだ。長年ここに住んでいる身の上なら、いくら嵐が強く吹こうと慣れたものだろうが、今の私には辛すぎる。やはり世間に戻ろうかしら。いや、それもまた辛いことだ。

ならばばしをれ嵐もぞ憂き

49 つれなしや野は霜がれの思草

肖柏

《解釈》嵐が身にしみて辛い。野の草は、みな霜枯れてしまつてゐる。それなのに私の心中の思草は枯れることがない。もし野の草に倣うのなら、心の中の思草も枯れ、私があの人を思うことはなくなるはずだが、私はあの人をことをずつと思いつづけている。

※前句の「ならば」は、先の付合では「馴れっこになる」の意。それが、この付合では「同じように倣う」の意に取りなされ、恋への句境の転換が鮮やかである。

つれなしや野は霜がれの思草

50 つか心の松も知られし

宗長

《解釈》野の草は、みな霜枯れてしまひました。それなのに私の心の中の思草は枯れることなく、あなたを待ちつづけています。けれど、そのことは、いつあなたに知られたことがあつたでしょうか。あなたは全く気付いてくれないのです。

※「心の松」は、「心の中に生じた松」ということで、松についての様々な属性の比喩として用いられる。ここでは、同音で「待つ」こと。例は「杉立てる門をぞ人はたづねける心の松は甲斐なかりけり」（拾遺・一四・八六六、よみ人しらず）など枚挙に暇がない。「松」は勿論、植物の木類であるが、「心の松」は比喩なので、植物と間隔二句以上で可とされる。従つて、第五四句の「紅葉」とは、指合にはなら

ない。

つか心の松も知られし

51 和歌の浦や磯隠れつゝまよふ身に

宗祇

《解釈》和歌の浦の磯に隠れて、途方に暮れている身の上。しかし、私の心の中には変わらない思いがある。その変わらない思いを、世の中の人は、いつ知ることがあつたか。誰も知つてはくれないのだ。

※前句の「心の松」は、先の付合では「待つ心」であつたが、この付合では、松の葉の色のように「変わらぬ心」の意で用いられている。例としては「ときはなる心の松もあるものを春ばかりこそ花は咲くらめ」（経盛集・二五）などが挙げられる。これも、句境の転換が鮮やか。

※卑下の表現の中に、連歌に対する宗祇の切実な思いを感じ取るべき句であろう。

※「松」に「和歌の浦」が寄合。他の例は「一むらの松の行方に水はれて／船も寄りくる和歌の浦波」（熱田神宮法楽永祿三年千句・第七「山何」五三／五四）など。証歌は「和歌の浦を松の葉ごしに眺むれば梢に寄する海人の釣船」（新古今・一七一・一六〇三、寂蓮法師）など。

和歌の浦や磯隠れつゝまよふ身に

52 満ちくる塩や人したふらむ

肖柏

《解釈》和歌の浦に塩が満ちよせてきた。まるで、その磯に隠れている人を慕つていくような塩ではないか。

※「和歌の浦に塩みちれば瀉をなみ芦辺をさしてたづ鳴きわたる」（続古今・一八一・一六三四、山辺赤人）を踏まえた付合である。

※宗祇の卑下の述懐に対して肖柏が応対した付合だとする金子金治郎氏の指摘は正しいと、私も考へる（宗祇名作百韻注釈、二四六ページ）。

満ちくる塩や人したふらむ

53 捨てらるゝ片われ小船くちやらむ

宗長

《解釈》塩が満ちよせて来る。それによって、破損し汀に放置されたまま朽ち残つていた小船が浮き上がり、漂つている。それは、まるで、乗る人を求めているようではないか。

※第五一句から、「浦・磯」「塩」「船」と、水辺が三句連続する。従つて体用の沙汰を吟味する必要があるが、第五三句の「船」は体用の外なので、問題が生じる余地はない。

※「片われ小船」の語は、調査の範囲で和歌からは先例が見出せない。ただし、連歌では「浮きしづむ片われ小船ぬしもなし」（享徳二年千句・第七「手何」四九）などの先例があり、新造語ではない。宗祇流の連歌で和歌に先例のない語が用いられるのは稀である。後考を俟つ。

捨てらるゝ片われ小船くちやらで

54 木の下紅葉尋ぬるもなし

宗祇

《解釈》木の下にたまっていた紅葉（の一ひら）が、（風に吹かれて、汀に）落ちる。それは、あたかも、破損し放置されたまま朽ち残っている小船のごとくである。紅葉も散りつくした。尋ねてくる人は、誰もいない。

※伊地知鐵男氏蔵本古注（以下、伊地知本）に「散りて後は見る人もなき様也。舟は一葉の心也。紅葉を舟にとりなしたる也」とあるのに従って解釈した。神宮本には水辺つまりて付けにくき所とぞ。祇庵のなれどもよく付かずとて、三人ながら一笑せられしと也」と見える。このエピソードが事実を伝えたものであるかは知らないが、的は得ている。「葉」が「舟」に見立てられるためには、「一葉」であることと、「水辺の情景」であることが必要であるが、この付合では、それが共に十分に表現できていないということである。解釈では、それを括弧内に補って、論理が通るようにした。

※「朽つ」に「紅葉」が寄合。『闇夜一灯』にはこの付合が所謂「体付け」の手本の一つとして挙げられている。他の例は「朽ちば身の情けもさこそ果ならめ／深山の庵に惜しき紅葉」（明応七年閏十月十六日「何人」三九／四〇）など。証歌を挙げた必要はあるまい。

木の下紅葉尋ぬるもなし

55 露もはや置きわぶる庭の秋の暮

肖柏

《解釈》暮秋の庭。少し前までは、こんな夕時分にはいっばいに露が置かれたものだが、冬が近付くにつれ置く露も稀になった。木々の紅葉も散り、その下にたまって朽ちつつある。訪れる人は誰もいない。ただ閑かな庭である。

※天満宮本に「尋ぬなし、閑庭のさま也」とあるのに従って、平凡に解釈した。ただし、太田本に「露が染めつくして、暮秋の庭には、染めむ葉もなき程に、尋ぬるもなきと付けなせり」とある解釈も捨てがたい。

※露は、秋には多く置かれるが、冬には少なくなる。まだ冬にならないのに、もう「置きわぶる」ようになったので、「はや」と言っている。更に理屈を言えば、夕露は昼間との寒暖の差が大きいほど多くなるが、冬近くなると昼間も気温が上がらず、露は少なくなるということ。

露もはや置きわぶる庭の秋の暮

56 虫の音ほそし霜を待つ頃

宗長

《解釈》暮秋の庭。少し前までは、こんな夕時分にはいっばいに露が置かれたものだが、冬が近付くにつれ、置く露も稀になった。鳴く虫の音は夜ごとにか細くなつて行く。いずれ霜の降りる時節となるが、その頃には、あの虫たちも死に絶えることだろう。

※虫は露を餌にすると言われているので、露が「置きわぶる」ようだと、虫の音もか細くなるという理屈である。『源氏物語』野分巻の「童べ下ろさせたまひて、虫の

籠どもに、露かはせたまふなりけり」という一節がよく知られている。「荒かりし野分のませも乱れつゝ露飼ふ庭の鈴虫の声」（為尹千首・七四六）などという和歌もある。

虫の音ほそし霜を待つ頃

57 寝ぬ夜半の心もしらず月すみて

宗祇

《解釈》鳴く虫の音は夜ごとにか細くなつて行く。いずれ霜の降りる時節となるが、その頃にはあの虫たちも死に絶えることだろう。床につくが、様々の思いが去来して眠ることができない。そんな私の心も知らぬげに、月は、いつもと同じように澄んだ光を投げかけている。

※伊地知本に「物を思ふときは寝られぬ也。月は何心なくて澄みわたる、面白き也」とあるのに従って解釈した。神宮本には「付くる心は、虫の寝ぬ心も知らずとなり」云々とある。それでも可であろう。

寝ぬ夜半の心もしらず月すみて

58 あやになれや思ひたえばや

肖柏

《解釈》寝ずにあの人の来訪を待つ。しかし、あの人は来ない。あの人のことを完全に諦めることができれば、こんな辛い思いをせずにすむのだけれど、そんなことは出来そうにない。私はどうすればよいのだ。そんな私の心も知らぬげに、月は、いつもと同じように澄んだ光を地上に投げかけている。

あやになれや思ひたえばや

59 頼むことあればなほ憂き世の中に

宗長

《解釈》もう絶対にあの人が私のもとに戻ることはないだろうと、そう悟ってしまったが、辛くても諦めればいだけのこと。しかし、あの人はいつかまた帰ってきてくれるのではという思いを捨てきれない。それだけに、皮肉なことだが、私の心はより一層辛くなるのだ。

※前の付合は「恋」、二句前は「恋」ではない。従って、この付合が「恋」でなければ「恋」が一句で捨てられることになるので、「恋」の付合として解釈した。ただし「恋」の二句以上連続の作法が成文化されるのは、文龜二年の肖柏補訂においてであり、それ以前「恋」の二句以上連続が、どれほど徹底して行なわれていたか、現在の連歌研究は未解明である。「恋」二句以上連続にこだわりさえしなければ、この付合も、世間一般のこととして解釈することも可能であろう。太田本には「世上にたのむことあれば、有る程うきある物なり。みなあやにくの事なり」とある。これは「恋」としての解釈ではない。後考を俟つ。

頼むことあればなほ憂き世の中に

60 老いてや人は身をやすくせむ

宗祇

《解釈》人というものは、なまじ当てにしたり願うことがあると、それが返って自身を苦しめることになりがちだ。歳をとれば、当てにしたり願うことが自ずと少な

くなり、比較的安らかな気持ちでいることができるだろう。

老いてや人は身をやすくせむ

61 越えじとの矩もくるしき道にして 肖柏

《解釈》歳をとると、人は、若い時よりも安らかな気持ちでいることができると言われている。孔子の語にも「七十にして、心の欲する所に従ひて矩を踰えず」とある。しかし、至らない私にとっては、「矩を踰えず」に生きようとするのも、中々苦しい道なのだ。

※「論語」為政編にある有名な「七十而従心所欲不踰矩」の一節を踏まえた付合である。

越えじとの矩もくるしき道にして

62 雪ふむ駒のあしびきの山 宗長

《解釈》私の乗っている馬は、雪の山道を、一歩一歩、苦しうに脚を引きずりながら進んでゆく。果たして、今日中に、この山を越えることができるだろうか。どうも、できそうにない。

※「矩」を「乗り」に取りなして、句境を、述懐から「旅」へ鮮やかに転換している。

※「矩・法」と「駒・馬」とが寄合。「心にや法のまことは知らるらむ／教へぬ道を駒は行くなり」（文和千句・第二「手何」三九／四〇）など、連歌では古くから好まれた手法である。

※『新撰菟玖波集』（一一二・一一三・四九）・『壁草』（大阪天満宮本九九八、続類従本一一九四）・『六家連歌抄』（雑一六）に入集。

雪ふむ駒のあしびきの山

63 袖冴えて夜は時雨の朝戸出に 宗祇

《解釈》旅のやどり。昨夜は時雨の音を聞きつつ眠りについた。目覚めると、山には雪が積もっている。今日は、あの山を越えねばならない。これから出発だ。寒さが身にしみる。馬よ、お前も大変だろうが、頑張ってくれ。

※「夜は時雨の朝戸出に」と、美しい言葉の連鎖の中に時間的経過による状況の変化を表現している所、私には見事としか言いようがない。「旅立つも露はらひ行く朝戸出に」（熱田神宮法楽慶安五年千句・第五「何船」六五）とかの凡庸な句と比較すれば、違いは誰にも明白であろう。この百韻の句の二々について味読して、この百韻のレベルの高さを実感して欲しい。

袖冴えて夜は時雨の朝戸出に

64 恨みがたしよ松風の声 肖柏

《解釈》旅のやどり。昨夜は時雨が降っていた。明日は雨の中を出発せねばならないのかと、憂鬱な気分であつたが、朝目覚めてみると時雨は止んでいる。終夜、時雨が降り続いてきたように聞こえたが、実際は、松風が時雨の雲を吹き飛ばし、途中からは、松風の音が時雨に紛れていたのだ。松風が身にしみて寒いのは辛い、雨の中を行かずにすむのは、風が吹いたおかげだ。恨みにばかり思つてはなるまい。

※ポイントは、夜の間に松風が時雨の雲を吹き払ったということ。それによって、今日は雨に濡れずに旅ができるという思いである。冬の雨の中の旅が、当時どれほど辛いものであつたかを追体験しようとするなら、四国で歩き遍路などをしてみればよい。時雨は濡れるが、「松風の時雨」なら濡れずにすむという発想の証歌として

は「雨とのみ吹く松風は聞こゆれど声には人も濡れずぞありける」（玉葉・一六・二一八八、貫之）などが挙げられる。

※「時雨」に「松風」が寄合。他の例は「寢覚には時雨を聞きし戸をあけて／冴えたる月にむかふ松風」（文明十八年九月晦日「山何」五五／五六）など。証歌は「今はまた散らでもまがふ時雨かなひとり更けゆく庭の松風」（新古今・六・五八七、源具親）など。

恨みがたしよ松風の声

65 花をのみ思へば霞む月のもと 宗長

《解釈》桜花を松風が散らす。何とも松風が恨めしい。しかし、この風は、月に厚くかかた霞を吹き払ってくれるだろう。そうすると、花と月を同時に賞することができる。松風をあながちに恨みにばかり思つてはなるまい。

※前句を理屈つけた付合であるが、その理屈付け方に意外性がある。そこに一抹の俳諧味を私は感じるのだから、いかがであろうか。

花をのみ思へば霞む月のもと

66 藤咲く頃のたそがれの空 宗祇

《解釈》夕月が霞みつつ夜を待つ晩春の黄昏時、藤の花がしなだれ咲いている。桜花は、数日前に散りはててしまった。それを惜しむ気持ちは今なお深い、この藤の黄昏の情趣も、それに劣らず惜しむべき思いがする。

※連続は二句以内のはずの植物が、三句連続している。天満宮本に「植物三句つゞき侍り。直しあらたむべきにあらず、不及力、執筆のあやまりになしておかれたり」とあるように、極めて稀で有名な違反例である。

※付句の仕立は「君にだに問はれてふれば藤の花たそがれ時も知らずぞありける」（後撰・三・一三九、つらゆき）を踏まえたものである。

藤咲く頃のたそがれの空

67 春ぞ行く心もえやはとめざらむ 肖柏

《解釈》桜も散り果てたある日の黄昏時、藤が静かに花房を垂れている。もう春も終わりのなだ。春自身も、この情景を見て、いま少しとどまっていたかと思つても、春も知れないが、それは出来ない相談なのだ。

春ぞ行く心もえやはとめざらむ

68 深山に残る鶯の声 宗長

《解釈》晩春の深山を行く。里では耳にしなくなつた鶯の声がまだ聞こえる。もう春も終わりのなだ。いくら鶯が心で惜しんでも、行く春を止めることはできない。

※前句の「心」は、先の付合では、春自身の心、それが、この付合では鶯の心となる。
 ※第六四句に「声」が用いられており、この句の「声」と間隔三句。同字は五句以上を隔てねばならないから、指合を生じている。紹巴以後の連歌なら、強く批判される所だが、宗祇流の連歌は、時に鷹揚である。

深山に残る鶯の声

69 うちつけの秋にさびしく霧たちて 宗祇

《解釈》昨日まで残暑が厳しかったが、今日になって、突然、いかにも秋らしい気配となった。山には霧がかかり、その向こうから、鶯の老いた声がチャツチャツと聞こえる。

※鶯は留鳥だから、一年中日本にいる。ただしホーホケキョと鳴くのは繁殖期のみ。先の付合の「鶯の声」は、勿論それである。この付合での声は、所謂「地鳴き」である。

※「鶯」と「霧」とが寄合。『和漢朗詠集』などに見える「山鶯咽霧啼尚少」の詩句が典拠。他の例は「鶯のなく音や我をさそふらむ／霧の奥なるあけぼの」山（長享二年十一月十日「何路」九／一〇）など。

うちつけの秋にさびしく霧たちて

70 今朝や身にしむ天の川風 肖柏

《解釈》残暑も去り、今朝は、突然に秋がやってきたような気配で、空には霧がかかっている。昨夜は七夕。二星はさぞかし、天の川に吹く秋風を身にしみて感じていることだろう。

※「霧」に「天の川」が寄合。他の例は「霧間にしろき水かすかなり／月にはや夕影みゆる天の川」（天文十八年梅千句・第六「山河」八六／八七）など。証歌は「こひくくて逢ふ夜はこよひ天の川霧立ちわたり明けずもあらなむ」（古今・四・一七六、よみ人しらず）など。

※七夕のことは、それだけでは「恋」としての取り扱いを受けない。従って、第七四句と指合にはならない。

今朝や身にしむ天の川風

71 衣うつ宿をかりぶし起き別れ 宗長

《解釈》交野の里に一夜の宿りを取り、朝早くにその宿を出発する。昨夜は遅くまで砵の音が聞こえた。今朝は、天野川の川風が身にしみる。

※銀河の「天の川」を河内国の名所「天野川」に取りなし、句境を旅に転じた付合である。

※「宿をかりぶし」は「宿を借る」に「仮臥」を利かせた秀句である。「狩りくらし七夕つめに宿からむ天の川原に我は来にけり」（古今・九・四一八、在原なりひらの朝臣）を踏まえる。なお、『伊勢物語』第八十二段により、その宿が交野の里であることは、当時の常識。その歌を典拠に「天の川」に「宿借る」が寄合。他の例

は「天の川とも心こそ見め／宿借らば月を今宵のあるじにて」（出陣千句・第七「朝何」二四／二五）など。

衣うつ宿を仮ぶし起き別れ

72 夢はあとなき野辺の露けさ 宗祇

《解釈》旅の宿を出て、秋の野の道を行く。辺りは露でいっぱいである。昨夜は砵の音で夢を覚まされた記憶だけは残っているが、どんな夢だったか思い出せない。

夢はあとなき野辺の露けさ

73 かげ白き月を枕のむらさ 肖柏

《解釈》秋の夜の野宿。ふと目を覚ます。夢を見ていたはずだが、どんな夢だったか全く思い出すことができない。枕のあたりの一叢の芒の穂も露でいっぱい、それが皓々とした月の光を映して風にそよいでいる。

※解釈は、太田本に「夢覚めて見れば、月枕に影すみて、むらさのきらきらとしたる也」とあるのに従った。天満宮本には「華麗の金玉なり」とある。しつかり味読してほしい。

※「夢」に「枕」、「野辺」に「芒」が寄合。共にわざわざ指摘するまでもないレベル。※三折裏で二つ目の「月」であるが、当時の連歌の作法では問題とならない。念のため。

かげ白き月を枕のむらさ

74 いっしか人になれつゝも見む 宗長

《解釈》秋の夜、床につこうとすると、庭の一叢の芒が、皓々とした月の光に照らさされている。この情景を、一体いつになったら、あの人と仲良く見ることができのらうか。

※「小牡鹿の入野の芒はつ尾花いっしか妹が手枕にせむ」（新古今・四・三四六、人丸）を踏まえた付合。この歌を典拠にして「芒」に「いっしか」が寄合。他の例は「小芒の岩根く折れふして／いっしか声の遠ざかる道」（慶長八年千句・第四「薄何」一七／一八）など。

いっしか人になれつゝも見む

75 遠近になりて浅間の夕煙 宗祇

《解釈》夕方になりました。浅間山の噴煙が空に立ち昇っています。私はそれをここから眺めています。あの人のいるところは、遠く離れたむこう側。今、どうしているのでしょうか。私と同じように、あの噴煙を眺めているのかしら。今は、このように離れ離れになっていますが、いつか、どうかして二人仲良く一緒に、浅間山を眺めたいものです。それは一体いつの日のことなのでしょう。

※「信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人に見やはとがめぬ」（新古今・一〇・九〇三、業平朝臣）を踏まえる。

遠近になりて浅間の夕煙

76 消ゆとも雲をせりとしらめや

肖柏

《解釈》夕方になりました。浅間山の噴煙が空に立ち昇っています。あれは、遠く離れたあなたを恋い焦がれる私の「思ひの煙」なのです。けれど、たとえ私がこのまま焦がれ死にしたとしても、あなたは、空の雲を見て、あれは自分を恋い焦がれて死んだ女の「思ひの煙」の末だとは、気付いてくれないでしょう。

※伊地知本に「かならず煙は雲と成る也。遠近と別れたる人は、消ゆとも其の雲とは知られじと也」とあるのに従って解釈した。「思ひの煙が雲となる」の証歌は「恋ひわびて絶えぬ思ひの煙もや空しき空の雲となるらむ」（金葉・二度本・八・四六五、民部卿忠教）など。

※「煙↓消ゆ」と、上句末から下句へ受け継ぐ「受けとりてには」などと呼ばれる手法。「寝る間の空にたなびく朝霞／立つを名残の雁や鳴くらむ」（熊野千句・第九「朝何」二五／二六）など、同類の先例である。

77 はかなしや西を心の柴の庵

宗長

《解釈》柴の庵を営み、弥陀仏の来迎を願う。しかし、その心も時として弛みがちである。こんな自分は、果たして臨終の時に、阿弥陀さまが雲に乗って迎えに来てくれる姿を見ることができようか。もし出来ないとしたら、何とかなないことではないか。

※前句の「雲」を「阿弥陀来迎の紫雲」に取りなしての句境の転換が鮮やかである。前句の「消ゆ」は、先の付合では「煙」のこと、この付合では「命」。

※「柴の庵」は植物としての取り扱いを受けないのが伝統的作法。従って、第七四句の「芒」とも、第八〇句の「林」とも指合にはならない。

78 身はかなしや西を心の柴の庵

宗長

《解釈》年老いて、柴の庵を営み弥陀仏の来迎をただひたすらに願う。若い頃は、世俗的なことに心を勞し、後生のことなど考えもしなかったが、今となれば、はかないことであった。

79 見る目にも耳にもすさび遠ざかり

肖柏

《解釈》年老いて、目も耳も遠くなり、耳目の楽しみとなることは何もなくなってしまった。今では、若い頃は一体何を楽しみにしていただろうかと、そう思われるほどだ。

80 冬の林に水凍る声

宗長

《解釈》冬枯れて色彩のなくなった林。その中の流れる水も凍ってゆくらしい、音が

次第にか細くなつてゆく。紅葉を眺めながら、せせらぎに耳をすませてこの林の道を歩んだ秋の日は、遠くなつてゆくのだ。

※前句の「見る目」に対し「冬の林」、「耳にも」に対し「水凍る声」と付けることによつて理屈づけた付合である。その理屈づけ方に意外性があり、そこに一抹の俳諧味があると私は感じるが、それを優美な表現で包んで目立たせないのが宗祇流連歌の品位。宗祇流連歌のレベルの高さがあらためて実感されよう。

※「耳」と「声」とが寄合。他の例は「耳だにも明らかならぬ老は憂し／声なへだてその法の場」（応仁二年正月一日「何人」五五／五六）など。

※第七四句に「見む」とあり、「見」字が間隔四句で、指合を生じている。後の紹巴以後の連歌なら強く批判される所であるが、宗祇流の連歌は比較的鷹揚である。

81 夕鳥寝にゆく山は雪はれて

宗長

《解釈》冬枯れて色彩のなくなった林。その中の流れる水も、夕方になって気温が下がりが凍ってゆくらしい、音が次第にか細くなつてゆく。空は寒々と晴れ、山々には雪が積もり、そこに寝に帰るべく、鳥がしきりに鳴いている。

※「夕鳥」の語は、勅撰集に見ないが、「月出づる峰の林の夕鳥しばしねぐらをとりに定めぬ」（四〇二一）など『草根集』から三例が見出される。他に『為尹千首』にも例（五七七）が見え、冷泉派の和歌に好まれたものと推察される。同様のことは、「手枕の月」「袖の夕暮」「雲にさへ」「漏らさじよ」「ひとり乱るゝ」「春の川づら」「花に月」「雲にも迷ふ」「雪の下庵」「芦の穂綿」「かの国」「朝わたり」「松が本」「散る桜あれば」「秋の枕」「水の秋風」等々のレトリック（以上、『三島千句』における出現順）についても言え、宗祇流連歌と冷泉派の和歌の表現の親近性を窺わせる。若い人のために、敢えて多言を弄する所である。

82 いらかの上の月の寒けさ

肖柏

《解釈》冬の日暮れ時、上空は晴れ、鳥はねぐらに帰ろうとしている。山々は雪におわれ、その中に萱屋根が見えるのは、寺なのだろうか。月は、今しもその萱の上で夜を待っているが、その光もいかに寒々としている。

※「いらか」は居所。第七七句に「庵」があり、間隔は四句で、指合を生じている。後の紹巴以後の連歌なら、強く批判される所であるが、宗祇流の連歌は比較的鷹揚である。

83 誰となく鐘に音して更くる夜に

宗長

《解釈》夜が更けて、鐘の音に目を覚ます。人音がするが、今時分、誰が何のために起きているのだろうか。ふと夜空を眺めると、萱の上に月がかかり、寒々とした光を放っている。

※近代の注釈はこの句を「釈教」とするが、「鐘」は、単独では釈教としての取り扱いは受けない。それを証する例(河越千句・第三「何船」の第五二―五五句など)はいくらでもあり、実際に調査すれば簡単に判ることなのに、近代の連歌研究はそれを怠っていたと言える。

誰となく鐘に音して更くる夜に

84 ふる人めきてうちぞしはぶく 宗祇

《解釈》夜が更けて、鐘の音に目を覚ます。人音がするが、誰が何のために、今時分起きているのだろうか。そう思っていると、いかにも老人らしい感じで咳払いをするのが聞こえた。

ふる人めきてうちぞしはぶく

85 蓬生や問ふをたよりにかこつらむ 肖柏

《解釈》昔、ちよっとした関係のあった人のことが気になって、その場所を訪ねる。そこはもう葎の宿となってしまっているが、人が住んでいるらしく、いかにも老人らしい感じで咳払いをするのが聞こえた。あれは、あの人に仕えていた女性だ。きっと、その間のことを訴えかこつことだろう。

※古注(天満宮本ほか)の指摘どおり、前句の「しはぶく」に触発されて、『源氏物語』蓬生巻の一シーンを面影にした付合である。本文に「いと物古りたる声にて、まづしはぶきを先に立て」と云々と見える。『源氏物語』の面影であるが、恋愛感情を詠じるものではないので、去嫌上「恋」として取り扱われない。

蓬生や問ふをたよりにかこつらむ

86 この頃しげさまさる道芝 宗長

《解釈》侘び住まいをしている人の居所を、久しぶりに訪問する。最近は何に訪問する人もいないのだろう、道の芝草も繁くなっている。住まいも蓬が生え放題だ。言えば、今の生活の寂しさ・辛さをかこつことだろう。

この頃しげさまさる道芝

87 暑き日はかげよわる露の秋風に 宗祇

《解釈》残暑は厳しかったが、この頃は日射しも弱くなり、朝夕は道芝も露しげくなっている。秋風が心地よい。

※天満宮本に「しげさは露の事也」とある。前句の「しげさ」は、先の付合では「道芝」、この付合では道芝に置かれる「露」のこととなる。

暑き日はかげよわる露の秋風に

88 衣手薄し蝸の声 肖柏

《解釈》昼間は残暑がきびしかったが、午後になって日射しも弱くなり、露を呼ぶ秋風が、まだ夏の薄着のままの袖に心地よく感じられる。蝸も鳴き始めた。

※平凡な句のようだが、天満宮本には「さる時節の様、無比類者也」とある。よく味読すべきであろう。「山陰ものこる暑さの暮れやらで／まだほのかなる蝸の声」(永

禄元年七月十八日「何船」八〇／八一)などの凡庸な付合とはレベルが違うことぐらいなら、誰でもわかる。

衣手薄し蝸の声

89 色かはる山の白雲うちなびき 宗長

《解釈》初秋の山。白雲が薄く衣をかけたようにたなびき、それを通して、漸く色づきはじめてた山の梢が見える。どこかから蝸の鳴く声が聞こえてくる。

※「衣」に「雲」が寄合。他に「よも織らじ身を空蟬のからころも／日影を障ふる空の薄雲」(紫野千句・第二「何木」二五／二六)など。「雲の衣」の歌語に拠る。証歌を挙げる必要はあるまい。

色かはる山の白雲うちなびき

90 尾上の松も心見せけり 宗祇

《解釈》次第に木々の紅葉も色まさる頃の山、白雲がたなびき、その隙から尾上の松の姿が見える。松は、秋となっても色を変えるものではないが、それでも、ちよっぴりセンチメンタルな様子である。

※神宮本に指摘する所だが、「色かはる山」の「紅」、「白雲」の「白」に対し、「尾上の松」の「緑」の色彩を添えた付合である。

尾上の松も心見せけり

91 たのめなほ契りし人を草の庵 肖柏

《解釈》俗世間を捨て草庵に隠れ住む身。必ず訪ねると約束してくれた人がいるのだが、その人はまだ来ない。その人の心が変わったのだろうか。寂しさがつのる。どうしようか。いや、やはりまだ待つべきだろう。尾上の松だって、変わらぬ色を見せて、その名のとおり「待つ」と言おうとしているようではないか。

※近代の注釈は、この付合を「恋」とするが、明白な誤り。「契る」は必ずしも「恋」ではなく、「庵」などを結んで用いられる時は、普通に、隠遁生活者とその知人との間の約束という意味である。「山里に契りし庵やあれぬらむ待たれむとだに思はざりしを」(新古今・一八・一五六七、前大僧正慈円)の和歌が有名。自讃歌である。

※「庵」は第七七句で「庵」が詠まれており、ここで二句目。「庵」は一座二句物であるが、二句用いる場合は「いほ」「いほり」と形を変えねばならないとするのが「新式」の本来の規定。この百韻は、二句とも「いほ」であり、違反している。ただし、当該の規定は宗祇流連歌では有名無実化しており、違反例は枚挙に暇がない(例示省略)。肖柏補訂で「但し、言ひかへずともあるべし」と注記されるのは、それを成文化(公認)したものである。

たのめなほ契りし人を草の庵
うときは何かゆかしげもある

宗長

《解釈》俗世間を捨て草庵に隠れ住む身。必ず訪ねると約束してくれた人がいるのだが、その人はまだ来ない。その人の心が変わったのだろうか。そうかも知れない。こんなに疎遠になってしまつては、訪ねようという気が起こらなくなるのも無理のないことだ。しかし、それでも自分には、その人を待つ以外のやりようはないのだ。※神宮本に「かゝる草庵なれば、うときもことわりなり。されども猶たのみてみよとなり。あまりにうとく成りてゆけば、床しげも無うなるとなり」とあるのに従つて解釈した。ポイントは、「うとき人」と「契りし人」が別にいるのではなく、「契りし人」が「うとくなる」というのが、世のならいだということである。

93 わりなしやなこそその関のまへ渡り

宗祇

《解釈》あなたと私の仲は切れませんでした。他人同士です。私の家の前には関所があります。す。「勿来の関」です。その意味はお解りでしょう、「もう来るな」ということです。普通なら、別れた女の所など、何のゆかしげもないはず。それなのに、あなたは、勿来の関の前を行つたり来たり。未練がましいつらありやしない。

※天満宮本に「なこそといふに、何の床しげかありて、わりなく前わたりするぞと也」とあるのに従つて解釈した。

※「勿来の関」は、当時は、山類として取り扱われていなかったと推測される。寛正三年正月二十五日「何人」の第三八〇句は「霞める山の末やたづねむ／人知れぬわが友なれや呼子鳥／老を勿来の関守もがな」のごとくで、山類の打越で「勿来の関」が詠まれている。同様の例は他にも存在する（明応三年十月晦日「何路」五三〇五七など）。従つて、第九〇句の「尾上」とも、第九六句の「山越え」とも指合にはならない。

※『下草』（金子本六四二、続類従本六一四）・『名所句集』（八〇五）に入集。
わりなしやなこそその関のまへ渡り

94 誰呼子鳥鳴きてすぐらむ

肖柏

《解釈》なこそその関の前を、呼子鳥は鳴きながら通り過ぎて行く。これはどういうことだ。「なこそその関」だから、勿論、お前は来るなということだろう。それなのに「呼子鳥」とは、（こつちへ来いと）呼んでいるということだ。一体どつちなんだ。無茶苦茶なことを言うな。

※「東路のなこそその関の呼子鳥なに／つくべき我が身なるらむ」（散木奇歌集・九・一二五六）を本歌とする付合である。これを証歌にして、「なこそその関」と「呼子鳥」とが寄合。連歌での他の例は「こたふるをおのが友とや呼子鳥／誰をなこそその関の春風」（文安雪千句・第十「花之何」五七／五八）など。

※優美な歌語に包まれているが、内容は全くの俳諧体である。近代の研究者には無視

されがちだが、これも宗祇流の一体。第四二、四五、六五、八〇、八四句も参照された。

誰呼子鳥鳴きてすぐらむ

95 思ひたつ雲路に霞む天つ雁

宗長

《解釈》「呼子鳥が鳴いて誰かを呼びながら通り過ぎて行つた」つて言うけれど、呼子鳥つてどんな鳥なの？ それは「雁」だよ。雁は、春になって北の国に帰ろうと思ひ立つと、「かりかり」つて鳴いて仲間を呼びながら霞の空を飛んで行くだろう。だから「雁」のことを呼子鳥つて言うんだ。

※天満宮本に「雁は我が名をよぶ鳥也。さて、呼子鳥を雁に取りなせる句なり。鳴きてすぐらむも雁の事也」とあるのに従つて解釈した。先の付合に引き続きこれも俳諧的な付合である。「雁は我が名をよぶ鳥也」の証歌は「行き帰りこゝもかしこも旅なれや来る秋ごとにかり／と鳴く」（後撰・七・三六二、よみ人しらず）など。連歌での例は「秋風に聞く世の中の憂さ／かり／と鳴きわたることあはれなれ」（那智籠・北野天満宮本三二四六〇）など。

96 さこそは花をあとの山ごえ

宗祇

《解釈》春の旅の山越え。雁が、北の故郷へと思ひ立つて、霞の空を行くのが見える。山々では、ようやく花が咲こうとしている。それをあとにして帰るのは、雁よ、さぞかし名残惜しいことだろう。

※天満宮本に「花をあとなして帰るは、雁もさこそは残りおほからめと云ふ心を、云ひ残したる付け様也」とあるのに従つて解釈した。

97 心をもそめにしものを世捨人

肖柏

《解釈》世を捨て、閑寂を求めて山中に独居する。しかし、そこも、春になると、山の花を見ようと人がやってくる。世捨人は、人の来ない奥へと、花をあとして山を越えて移り行く。世捨人といえども、春の花を賞したい心はあるはずだが、それをふり捨てて行く気持ちを思いやるべきだろう。

※ポイントは、山居の静寂が、花を見に来る人のために侵されるので、更に山の奥へと移動するということである。「とふ人もあらじと思ひし山里に花のたよりに人目みるかな」（拾遺・一・五一、もとすけ）など、古くより詠ぜられる状況である。

98 出でば仮なる宿りともなし

宗長

《解釈》一度は栄達を夢見た世を、捨てようと決心をする。しかし、いざ捨ててみると、何かにつけて様々のことが思ひ出される。所詮この世は仮の宿りと思うからこそ、捨てる決心をしたのであるが、これでは、仮の宿りとはとても思えなくなつてくる（それでも、その気持ちをふり捨てるのが、本当に世を捨てるということなのだ）。

※伊地知本に「いつかたも、住めば仮なる宿にてはなしと、執心したる心也」とあるのに従って解釈した。言わずもがなだが、前句の「心をそめ」た対象は、先の付合では「花」、この付合では「この世での栄達」となる。

出でば仮なる宿りともなし

99 露の間を憂きふる里と思ふなよ 宗祇

《解釈》願うべき常在真実の世界に比べれば、この世は露の間でしかない。その露の間のこの世を、「辛くても帰らねばならない故郷」と勘違いしてはならない。一たび出離したならば、この世は仮の宿りですらないのだ。

※伊地知本に「暫時の間を、うき古郷と思ふなよ、たゞ仮の宿と云ふなり」とあるのに従った。ポイントは「露の間」とは、人がこの世に存在する時間のことだということである。

※「憂きふる里」の例は、和歌に先例がいくつかあるが、ここで念頭にあったのは「あまたたび斧の古柄はすげ換へて憂きふる里になに帰らまし」（山田法師集・三〇）であったと私は考える。如何。

※『下草』（金子本一〇七八、続類従本一〇六〇、東山御文庫本一〇七二）に入集。

露の間を憂きふる里と思ふなよ

00 一村雨に月ぞいざよふ

肖柏

《解釈》故郷で月を眺めようとしていたが、あいにくの村雨で、月をみる事ができない。だからと言って、故郷のことを、ことさらに恨みがましく思うべきではない。所詮、少しの間のこと。村雨が通り過ぎれば、夜空をいざよつて月が姿をあらわすはずだ。この世も同じこと。辛いからと言ってことさらに恨みに思うべきではない。いつか、真如の月を見る事ができるだろう。

※天満宮本に「月にうき村雨は、露のあひだなるべし。さのみはうらみまじき雨ぞと也。古郷のうきは、月にかゝる村雨のほどぞと観念したる義也」云々とあるのに従って解釈した。

※「露」に「村雨」が寄合。他の例は「露の身は住むもしばしの柴の庵／降るとしもなき風の村雨」（応永三十年五月二十五日「山何」一七／一八）など。証歌としては「村雨の露もまだひぬ真木の葉に霧たちのぼる秋の夕暮」（新古今・五・四九一、寂蓮法師）が有名。

※近代の注釈は、この挙句が祝言的でないことを異例とするが、解釈で示したとおり宗教的な救済を暗示するものであり、その点で祝言的に準じ、挙句の伝統的作法を根本的に否定するものではないというのが、私の考えである。

「湯山三吟」去嫌一覧（I）

		季	七	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	積	人	名	衣	時	夜	風	聞		
初表	01	うす ゆき に このはいろこき やまちかな	冬				木	山				降													
	02	いはもとすすき ふゆやなほみむ	冬				草																		
	03	まつむしに さそはれそめし やといてて	秋					虫			居														
	04	さよふけけりな そてのあきかせ	秋																	衣		夜	風		
	05	つゆさむし つき もひかりや かはるらむ	秋	月									降		光								夜		
	06	おもひもなれぬ のへのゆくすゑ				旅																			
	07	かたらふも はかなのともや たひのそら				旅													人						
	08	くもをしるへの みねのはるけさ				旅			山					聳											
初裏	09	うきはたた とりをうらやむ はな なれや	春				木	鳥																	
	10	みをなさはやの あさゆふのはる	春															人			×				
	11	ふるさとも のこらすきゆる ゆき をみて	春								居	降													
	12	よにこそみちは あらまほしけれ																							
	13	なにをかは こけのたもとに うらみまし				述	×													衣					
	14	すめはやまかつ ひとつもたつぬな							×										人						
	15	なもしらぬ こくさのもとに あとしめて					◎																		
	16	あはれは つき に なほそそひゆく	秋	月											光								夜		
	17	あきのよも かたるまくらに あげやせむ	秋	枕	恋																	△	夜		
	18	おもひのつゆを かけしくやしき	秋		恋								降												
	19	たかならぬ あたのたのみを いのちにて			恋														人						
	20	さそふつてまつ わひひとそうき																	人						
	21	すみはなれ いまはほとさへ くもぬちに												聳											
	22	いりにしやまよ なにかさひしき							山																
一表	23	わきてその いろやはみゆる まつのかせ		松			木																風		
	24	いつみをきけは たたあきのこゑ	夏							水														聞	
	25	ほたとふ そらによふかく はしめして	夏					虫			□												夜		
	26	ものおもふたまや ねむかたもなき			恋																		夜		
	27	まくらさへ しろとはしるな わかこころ		枕	恋														人				夜		
	28	なみたをたにも なくさめにせむ		涙	恋																				
	29	ふちころも なこりおほくも けふぬきて		衣		述	×													衣					
	30	いてむもかなし あきのやまてら	秋						山										積						
	31	しかのねを あとなるみねの ゆふまくれ	秋						獸	山													夕		聞
	32	のわきせしひの きりのあはれさ	秋										□	聳	□									風	
	33	しつかなる かねに つき まつ さとみえて	秋	月							居				光								夜		
	34	ゆきてころを みたさむもうし			恋																				
	35	われならて かよふやひとも しのふらむ			恋														人						
	36	ふるきみやこの いにしへのみち				述																			
一裏	37	さく はな も おもはさらめやはるのゆめ	春	夢			木																×		
	38	さくらといへは やまかせそふく	春				木	山															風		
	39	あさつゆも なほのとかにて かすむのに	春									降	聳								朝				
	40	うちなかむるも あちきなのよや																							
	41	ふくるまで みのうき つき を いみかねて	秋	月											光			人					夜		
	42	いまよりいとふ なかきよのやみ	秋																				夜		
	43	いさりひを みるもすさまし おきつふね	秋	船						水													夜		
	44	ゆふへのなみの ありがたいこゑ								水													夕		聞
	45	ほととぎす なのりそれとも たれわかむ	夏				□	鳥	□									人							
	46	かへらむたひを ひとよわするな				旅												人							
	47	ありぬやと こころみにすむ やまさとに							山		居														
	48	ならははしをれ あらしもそうき																						風	
	49	つれなしや のはしもかれの おもひくさ	冬		恋			草					降												
	50	いつかこころの まつもしられし		松	恋		□																		

「湯山三吟」去嫌一覧 (Ⅱ)

		季	七	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	積	人	名	衣	時	夜	風	聞					
三 表	51	わか	の	うら	や	い	そ	か	く	れ	つ	つ	ま	よ	ふ	み	に	水										
	52	みち	く	る	し	ほ	や	ひ	と	し	た	ふ	ら	む				水										
	53	す	て	ら	る	か	た	わ	れ	を	ふ	ね	く	ち	や	ら	て	船										
	54	こ	の	し	た	も	み	ち	た	つ	ぬ	る	も	な	し				秋									
	55	つ	ゆ	も	は	や	お	き	わ	ふ	る	に	は	の	あ	き	の	く	れ	秋								
	56	む	し	の	ね	ほ	そ	し	し	も	を	ま	つ	こ	ろ				秋									
	57	ね	ぬ	よ	は	の	こ	こ	ろ	も	し	ら	す	つき	す	み	て		秋	月								
	58	あ	や	に	く	な	れ	や	お	も	ひ	た	え	は	や					恋								
	59	た	の	む	こ	と	あ	れ	は	な	ほ	う	き	よ	の	な	か	に		恋								
	60	お	い	て	や	ひ	と	は	み	を	や	す	く	せ	む													
	61	こ	え	し	と	の	の	り	も	く	る	し	き	み	ち	に	し	て										
	62	ゆ	き	ふ	む	こ	ま	の	あ	し	ひ	き	の	や	ま				冬									
	63	そ	て	さ	え	て	よ	る	は	し	く	れ	の	あ	さ	と	て	に	冬									
	64	う	ら	み	か	た	し	よ	ま	つ	か	せ	の	こ	ゑ					松								
三 裏	65	は	な	を	の	み	お	も	へ	は	か	す	む	つき	の	も	と	春	月									
	66	ふ	ち	さ	く	こ	ろ	の	た	そ	か	れ	の	そ	ら				春									
	67	は	る	そ	ゆ	く	こ	こ	ろ	も	え	や	は	と	め	さ	ら	む	春									
	68	み	や	ま	に	の	こ	る	う	く	ひ	す	の	こ	ゑ				春									
	69	う	ち	つ	け	の	あ	き	に	さ	ひ	し	く	き	り	た	ち	て	秋									
	70	け	さ	や	み	に	し	む	あ	ま	の	か	は	か	せ				秋	×								
	71	こ	ろ	も	う	つ	や	と	を	か	り	ふ	し	お	き	わ	か	れ	秋									
	72	ゆ	め	は	あ	と	な	き	の	へ	の	つ	ゆ	け	さ				秋	夢								
	73	か	け	し	ろ	き	つき	を	ま	く	ら	の	む	ら	す	す	き		秋	月	枕							
	74	い	つ	し	か	ひ	と	に	な	れ	つ	つ	も	み	む													
	75	を	ち	こ	ち	に	な	り	て	あ	さ	ま	の	ゆ	ふ	け	ふ	り			煙							
	76	き	ゆ	と	も	く	も	を	そ	れ	と	し	ら	め	や													
	77	は	か	な	し	や	に	し	を	こ	こ	ろ	の	し	は	の	い	ほ										
	78	み	の	ふ	り	ぬ	ま	は	な	に	お	も	ひ	け	む													
名 表	79	み	る	め	に	も	み	み	に	も	す	さ	ひ	と	ほ	さ	か	り										
	80	ふ	ゆ	の	は	や	し	に	み	つ	こ	ほ	る	こ	ゑ				冬									
	81	ゆ	ふ	か	ら	す	ね	に	ゆ	く	や	ま	は	ゆ	き	は	れ	て	冬									
	82	い	ら	か	の	う	へ	の	つき	の	さ	む	け	さ					冬	月								
	83	た	れ	と	な	く	か	ね	に	お	と	し	て	ふ	く	る	よ	に										
	84	ふ	る	ひ	と	め	き	て	う	ち	そ	し	は	ふ	く													
	85	よ	も	き	ふ	や	と	ふ	も	た	よ	り	に	か	こ	つ	ら	む										
	86	こ	の	こ	ろ	し	け	さ	ま	さ	る	み	ち	し	は				夏									
	87	あ	つ	き	ひ	は	か	け	よ	わ	る	つ	ゆ	の	あ	き	か	せ	に	秋								
	88	こ	ろ	も	て	う	す	し	ひ	く	ら	し	の	こ	ゑ				秋	衣								
	89	い	ろ	か	は	る	や	ま	の	し	ら	く	も	う	ち	な	ひ	き	秋									
	90	を	の	へ	の	ま	つ	も	こ	こ	ろ	み	せ	け	り													
	91	た	の	め	な	ほ	ち	き	り	し	ひ	と	を	く	さ	の	い	ほ										
	92	う	と	き	は	な	に	か	ゆ	か	し	け	も	あ	る						恋							
名 裏	93	わ	り	な	し	や	な	こ	そ	の	せ	き	の	ま	へ	わ	た	り										
	94	た	れ	よ	ふ	こ	と	り	な	き	て	す	く	ら	む				春									
	95	お	も	ひ	た	つ	く	も	ち	に	か	す	む	あ	ま	つ	か	り	春									
	96	さ	こ	そ	は	は	な	を	あ	と	の	や	ま	こ	え				春									
	97	こ	こ	ろ	を	も	そ	め	に	し	も	の	を	よ	す	て	ひ	と										
	98	い	て	は	か	り	な	る	や	と	り	と	も	な	し													
	99	つ	ゆ	の	ま	を	う	き	ふ	る	さ	と	と	お	も	ふ	な	よ	秋									
	100	ひ	と	む	ら	さ	め	に	つき	そ	い	さ	よ	ふ					秋	月								